2022年8月7日（日）主日朝礼拝説教

『地の塩・世の光』井上隆晶牧師
レビ2章 13節、マタイ5章13～16節

原爆投下から77年目を迎えた8月6日（土）、広島の平和記念公園では被爆者や遺族らが訪れ、犠牲者に祈りをささげました。漫画家・中沢啓治さんは、原爆で家族三人を失いますが、その体験から『はだしのゲン』を描きました。彼はこう言っています。「誰があんな陰惨なものを描きたいと思いますか。本当に僕なんかもう嫌で嫌でしょうがないですよ。いまだに原爆の資料も読みたくないし、被曝のシーンを描いていると臭いまで浮かんでくる」「口で平和、平和というのは僕は絶対に信用しない。…だけど平和の本当の本質を知っているということはどういうことかというと、人間の汚さ。僕は原爆を落とされた惨状の地獄も、すごい人間の地獄だと思ったけど、もっと戦後を生きた時の方が地獄だと思った。」戦争の話はどの話を聞いても悲惨です。人間の罪深さを思います。その罪が自分の中にもあることを思います。犠牲者のために神に祈ると共に、平和のために主によって働き続けたいと思います。

❶【地の塩・世の光】

イエス様はご自分を信じる弟子たちのことを「**あなたがたは地の塩である**」（13）といわれました。塩の働きは、清めること、腐敗を防ぐこと、味をつけることにありますが、私たちがこの世に対してそのような立派な働きをせよと言われたのでしょうか。そうではないように思います。先を読んでみましょう。「**だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味がつけられよう。もはや、何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである。**」今の塩はほぼ100%純粋なナトリウムですが、イエス様の時代の塩は死海から採ってきたもので27%ほどがナトリウムで、他に多くの不純物を含んでいました。ですから放っておくと塩気が抜けてしまい、外に捨てられたようです。聖書の別の箇所に「**人は皆、火で塩味がつけられる。…自分自身のうちに塩を持ちなさい。**」（マルコ 9：50）という言葉があります。これは人は聖霊によってキリストの味がつけられる、自分の内にキリストを持てという意味です。ですから「**塩**」というのはキリストの事だというのが分かります。塩味がないということは、キリストの味や香りがしないクリスチャンのことを指しているのです。塩気がないということは、ただ「ああこの人クリスチャンらしくないね」というような次元の話を言っているんじゃあなくて、**キリスト無しでは自分はどこまでも汚れ、落ち続け、腐ってしまう存在なのだと知らねばならないと思うのです。人間はそれほど罪深いのです。**
続いてイエス様はご自分を信じる弟子たちのことを「**あなたがたは世の光である**」（14）といわれました。この場合「**光**」とはキリストの事であり、私たちは燭台になります。燭台がテーブルの上に置かれて家全体を照らすように、私たちはこ

の世に置かれて、この世の人を照らすのです。キリストという光を輝かす燭台として私たちは選ばれたのです。燭台が金であろうと、鉄であろうと関係ないのです。火がついているかどうかが大事なのです。聖書の別の個所に「**あなたの中にある光が消えていないか調べなさい。**」（ルカ 11：35）と書いてあります。自分の中にキリストという光が消えていないかを調べろというのです。家の中に LED ライトのような明るい光があれば、窓からそれが外に溢れて見えます。同じようにキリストという光が内側で強く輝いている人は、外側に現れてくるのです。その人の顔は輝き、その言葉は喜びに溢れ、態度は柔和になります。しかしキリストという光がローソクの光のように弱い人は、外側に光が溢れることはなく、薄暗く見え、この世を照らすことは出来ないのです。

❷【まず、自分自身が上からの命に満たされなければならないこと】

塩に塩気がなくなれば何の役にも立ちませんし、燭台に火が灯っていなければ何の役にも立たないように、私たちはキリストがいなければ何も出来ず、何の役にも立たない者なのです。牧師というのは神の働きをしているのでそれがすぐに現れてしまいます。

●先日ある人とお話をしました。彼女の中には何か欠けているものがありました。それが何であるのか分かりません。でも職場に来ればスイッチが入り、元気な振り、明るい振りをしなければなりません。期待されているので無理をして働いているのです。だから家に帰ると緊張の糸が切れ、家族に当たってしまいます。自分が悪いのは分かっているけれどもどうしてよいのか分からないのです。またある人からは「働く意味が分からない」と言われました。何度も仕事を辞めようとしたが、説得され惰性で仕事をしているというのです。彼女の中には「喜び」がありませんでした。彼女たちだけではありません。コロナ感染症や戦争などの社会的ストレスが続いているので、緊張の糸が切れてしまう人が多いのです。人は誰でもいつも何か「満たされないもの」があり、「飢え渇いて」います。欠けているものをサプリメントのように補わおうと思い、世の人は、旅をしたり、遊んだり、おいしい物を食べたり、お酒を飲んだり、買い物をしたりして満たそうとします。しかしそれらのものは一時的にしか私たちに喜びと平和を与えてくれません。人の魂はすぐに枯渇します。ある人は高いお金を出してカウンセリングに通います。しかしカウンセリングは自分の中にある怒り、恐れ、不安を出させてその人を楽にし、感情をコントロールする方法は教えますが、一番大事なものを与えません。それは本当の命です。本当の愛と平安です。

サムエル記の中に、少年ダビデが巨人ゴリアトに勝った物語がありますが、なぜ彼はそんなに強いのでしょう。少し前を読むと、祭司サムエルが油を注いだ日から「**主の霊が激しくダビデに降るようになった。**」（サムエル上 16：13）とありました。この神の力によって少年ダビデは、巨人に勝ったのです。聖霊が働くと、

恐れがなくなり勇気がでてきます。そして生き生きしてきて活動が始まります。命はじっとしないからです。神の愛が分かるので喜びと平和に満ちます。「**主はダビデと共におられ、サウルを離れ去られたので、サウルはダビデを恐れた。**」（サムエル上 18：12）と書かれています。榎本保郎牧師はこの個所についてこう言っています。

●「サウルはすでにいのちを失っていたのであり、ダビデはそのいのちに生かされ、その全能のみ手によって立っていたのである。…宗教はしばしば生命にたとえられる。その内に生命が流れていなければ、いかなる伽藍も無用の長物であり、荘厳な儀式も欺瞞と虚構にすぎない。人はそのようなものに引かれることはない。人々の宗教に対する無関心を嘆く前に、人心をとらえ得ぬ宗教自身をこそ嘆くべきである。…自らが主の霊に満たされることが伝道の秘訣である。自身福音に生かされていることなしに、どうして福音を他に伝え得よう。」

本当にその通りだと思いました。自分の中に飛び上がるほどの喜びがあるだろうか、神の命に溢れて輝いているだろうか、人間の力だけで何とか頑張ろうとしていたのではないかと反省しました。大事なのはまず、神の力と命を豊かに受けることです。人は自分の持っているものしか、他者に与えることは出来ないからです。

❸【キリストという光を人々の前に輝かそう】

先日の聖書朗読で、中風の人をいやす物語を読みました。そこを読んで教会員のＴさんがこんなことを言われました。「私を大勢の人がイエス様の所に連れて来てくれました。それなのに、その人たちにではなく、この私にイエス様は「あなたの罪は赦される」と言ってくださいました。なぜ、私なのかは分かりません。でも本当に感謝します。」それを聞いて、本当にそうだなあと思いました。

戦争によって大勢の人が犠牲になって平和が実現しました。でも人間の罪深さが再び、この平和を破壊しています。人間の力ではどうすることもできないのを感じます。私は神に期待したいと思います。未熟児であった私がなぜ生かされ、カルトから救われ、罪が赦され、信仰が与えられたんだろう、と思うことがあります。それは主の証し人になるためだったのだと思うのです。私はイエス様に出会って、人生が変わりました。私はキリストと共に生きることを始めました。キリストは私の腐敗を止めて下さいました。キリストは私の罪を負われました。キリストによって死は終わり、私の中に本当の命が始まりました。私はその証人なのです。**この世はすべて神を抜きにして生き、考えようとします。神を抜きにして平和を造ろうとします。それが罪なのです。自分の罪深さを知る事、そして神に帰ることが必要です。**天は神の玉座、地は神の足台、教会はキリスト自身です。主は私たちと共におられ、この世界を背負っておられます。私たちは今日も神の中を歩いているのです。このキリストを語り続けて行きたいと思います。